



中山忠彦先生のご逝去について

白日会会長の中山忠彦先生が、令和六年（2024）九月二十四日に、肺炎のため千葉県の国立国府台病院にてお亡くなりになりました。

徒さんによる密葬でありましたが、中山先生が特に親しかった方々も駆け付けられ、町の小さな教会が一杯となりながらも厳かだしめやかなご葬儀となりました。

ご葬儀は奥様の良江夫人を喪主として、市川市三本松教会で、前夜式と告別式の正統プロテスタント教会葬でのご葬儀が執り行われました。親族と友人と信

なお、白日会のホームページで、中山先生のご逝去と密葬の報と共に「偲ぶ会」を予告いたしました。中山忠彦先生を「偲ぶ会」として、令和七年三月二十一日(水)に東京會館（丸の内）にて行われることとなりました。（会費制となります。5頁参照のこと）

中山先生は昨年七月に奥様と共に長野県立科町蓼科の山荘へ、恒例の避暑に向かわれました。山荘の直ぐ傍に「アカデミー中山 in 蓼科」があり、例年通りサマーセミナーが行われ、中山先生も元気にそして精力的にご指導をされていました。また十月に予定されていた日本橋高島屋の個展に向け、新作を山荘に持ち込まれて制作に勤しまれました。九月初



会 報

白日会

第63号
2025.2

白日会事務所

白日会事務所

〒104-0031 東京都中央区八丁堀四一八-11011

TEL (03) 6280-5218 (FAX 兼)

郵便振込 0019-41398157 白日会

HP: <https://www.hakujitsu.com>

MAIL: hakujitsu-mail@trad.ocn.ne.jp

頭、下山直前に発熱され、市川のご自宅に戻られると直ぐに国府台病院に向かい、肺炎との診断のため緊急入院されました。懸命な治療と闘病を続けましたが、残念ながら九月二十四日に逝去されました。ご親族への最後のお言葉が、高島屋個展へのご指示だったそうです。

日本橋高島屋の中山先生の個展は、十月二十三日(水)〜二十八日(月)に無事開催され、多くの方にご来場いただきました。なお、中山先生は生前に陶器二三雄先生（建築家・中山邸のスタッコ※漆喰壁を制作）に個展の展示構成をお願いされており、斬新な展示と共に、アトリエの状態を再現したイーゼルとキャビネット、そして日展に向けた木炭による描き出しの百号作品が展示されました。その後、個展は大阪、京都、横浜、名古屋と年内に巡回されました。

今年三月に国立新美術館で開催される第101回白日会展では、2A第5室（例年中山先生の作品が陳列される部屋）で、中山先生の代表的油彩画19点、晩年密かに制作されていた彫刻2点が展示される

予定です。またこの特別陳列作品と中山先生の紹介を中心としながら、中山先生とご関係の深かった方々と白日会の会員からの寄稿文を集めました「追悼—中山忠彦—」の特別図録の刊行を予定しています。

なお、令和六年十一月十日の総会において、斎藤秀夫副会長が、会長代行に就任いたしました。（4頁参照）ここに中山忠彦先生のご遺志を継承して白日会は進み行く所存ですので、今後とも何卒宜しくお願い申し上げます。



▲先生の作品とイーゼル等の展示された個展会場風景（日本橋高島屋）
撮影：熊谷明子

白日会創立百周年記念展 報告

令和六年三月二十一日(木)～四月二日(月) 会場：国立新美術館

授賞式・会長挨拶

中山忠彦

この度は誠にありがとうございます。百周年といいますが、この百年の間には白日会からは立派な作家たちが育っていききました。これからも更にそういう方々が増えていくことが楽しみでなりません。今日、受賞なさいます方々の年齢層は、更に若くなっているように私は思います。これはもう他の研究団体、普通の団体でもありえないことです。白日会だけの現象がここにあります。大変頼もしい将来を約束してくれていると思います。



私は残念ながら白日賞というものをもらったことがなく、何とか欲しいと思ったものですが、今更もうう訳にもいかないと、六十年前、当時の白日会は、非常な疲弊の状態にあり、伊藤清永先生でさえ、「もう中山君、白日会はやめようか」とおっしゃられました。これは、白日会から油絵だけが抜けるということとは困るからといって止められて、やっと洋画部門が生き残って今日に至っています。今日はお陰様で優秀な作家が増えましたから、そういうことは全く考えずにおそらく研究団体の中では一番立派な団体だと私も自負しております。今日受賞される方々は将来を担って下さるわけですから、尚、研鑽を積んだ上で、白日会の為に役に立っていただきたいと思えます。本日はおめでとうございます。



▶ 絵画部 審査風景

創立百周年記念展概要

事務所・常任委員 寺久保文宣

コロナ禍もひとまず終了した99回展後、社会が活性化に向かう中、白日会創立百周年記念展は盛況の内に、名古屋巡回展、関西巡回展、そして各選抜展を含め無事に全事業を終了しました。

百周年記念展は、特別陳列「白日会百年の軌跡」で全創立会員からその後当会で重要な役割を果たした会員から伊藤清永前会長までの、既に物故された作家33名の作品を、拡張された第7室において展示いたしました。なお創立会員中澤弘光先生の生誕150



▶ 吉田三郎の彫刻作品の展示作業



▲ 中澤弘光生誕150年記念特集の陳列風景

年とも重なり、お孫さんでありご遺族の中澤允伸氏と三井弦氏(版画家)のご協力により中澤弘光先生のコーナーが設けられました。またこの場をお借りして特別陳列にご協力頂きました美術館や所蔵家

様他関係各位にお礼申し上げます。

特別陳列と並行して、懸案でありました「白日会史Ⅱ」の代わりとして、白日会創立からの歴史的道筋と理念のあらましを記した総合版、特別図録「白日会百年の軌跡」を刊行し、特別陳列作家他を加えた49名を紹介しながら当会百年の歴史を顕彰しました。なお特別図録と中山先生作品による絵皿が記念品となります。



▲ 特別図録



▲ 記念絵皿



▲ 祝賀会会場風景

本100回展より、当会初となる内覧会を施行し、出品者相互の研究的な場として内覧会を第101回展以降も継続する方向となりました。またコロナ禍により95回展以降行っていなかった精養軒での祝賀会を開催しました。なお精養軒等を使用する祝賀会は5年ごとの記念展時とし、通常においては内覧会日に授賞式に続き美術館講堂を使用し「オープニングレセプション」(101回展は行いません)とし

て簡素化する方向となりました。

会員(常任委員の審査の為、常任委員を除く)の出品作中最も優秀な作品に与えられる会員賞、そして99回展からの近鉄百貨店賞に続き、100回展より法人寄託賞中の百貨店賞として、あらたに高島屋賞と大丸松坂屋百貨店賞が加わりました。なお百貨店賞は各百貨店美術担当の方の推薦と会長以下常任委員会の承認により授賞を決定しています。例年行ってきました(99回



▲ 公開クローキーク会場風景

展より復活)公開クローキーク講座は若手作家へ移行され、ギャラリートークの午前午後二部制を展開しました。彫刻部

の配置と水彩部門の会場構成の変更を行いました。白日会は「審査と展示」を「価値の表現」を位置づけ、それらの適切さを指し続けています。今後一層美術公募団体としての核を大事にしていきたいと思っています。

なお、近年を通じ、一般出品者は四年間の新型感染症の危機時代の中でも大きな減少は見られず、入場者数は新型感染症以前と同水準に迫りつつあります。

こうして創立百周年記念展の慶事をつつがなく終えた今秋、白日会は中山忠彦先生という大きな柱を失いました。中山先生は百歳まで生きて後進を育成したいと語られておりました。

今後の多難も予期され、また現代の困難な社会状況そして国際状況、そして美術状況の中、齋藤秀夫会長代行を筆頭に、中山先生のご遺志を継ぐべく白日会は一丸となって、益々の研鑽を重ね総力を将来の建設に傾け邁進していきたいと思っております。出品者ならびに関係の方々には、何卒ご協力賜りますようお願いいたします。



▲ 特別陳列の会場風景



秋の総会 会長代行挨拶

齋藤秀夫

九月二十四日の朝早く、中山先生の甥御さんの大野敦史さんから電話がありました。朝三時に意識を失ったと、そして現在は蘇生したというような電話がありました。それで慌てて、先生が入院していた国府台病院に行ったんですけれど、残念ながらその日の午後にお亡くなりになりました。

今でもまだ全然信じられなような気持ちなんです、絵を描いているときも、ふっと思うと「ああ、先生が亡くなったんだな」という、そんな気持ちで何か寂しくなっています。

それでも、もう私たちはこんなことを言っていられなくて、先生が百周年記念展で白日会の成果を全部まとめてくださいましたので、これから私たちが101回目からの新しい白日会を作っていくかなければならないと思います、先ほどの常任委員会これから一年

間かけて白日会をどんなふうによつていったらいいかというような話をしました。一年私が会長代行として、これらの白日会をどんな風にしていくか、そんなことを含めて考えていきたいと思っています。

私にどれだけのことができるかわかりませんが、皆さんとともに新しい白日会を作っていくかと思っておりますのでどうかよろしくお願いいたします。

巡回展報告 ※夏の総会より

名古屋展

中部支部長 竹内 恵

令和6年4月9日(火)〜14日(日)

愛知県美術館ギャラリー

白日会創立百周年記念展・名古屋展のご報告をさせていただきます。

今回は、創立百周年記念展ということでも会員の方々のモチベーションは非常に高く、選抜された作品も例年に増して充実しており、素晴らしい展示会になったと思っております。

ます。

中山先生をはじめ、中谷先生、寺久保先生の展示指導をいただきありがとうございます。

昨年は思いがけないNHKの取材があり、有料入場者の飛躍的な増加がありました。今回は、共催の東海テレビが開会30分前から取材に訪れ昼のニュースで放映。中日新聞も開幕と同時に来館、翌日の朝刊に掲載されました。テレビ・新聞を見て駆け付けたいという観客も多く見受けられました。

今回、中部の会員が内閣総理大臣賞を受賞したことが大々的に報じられることも相俟って、過去最高の入場者数につながったかと思われ

ます。観客の評判も良く、この地域でも白日会の認知度が高まっていることを実感いたします。毎年白日展を楽しみにしている方々へより良い作品を呈示できるように改めて心を奮い立たせた次第です。

コロナ流行もほとんど問題なくなり、懇親会・レセプションも復活しました。今回は大村愛知県知事、河村名古屋

◀名古屋巡回展祝賀会での授賞式



市長のご臨席を賜り、はなやかな祝賀会となりました。大村知事は、十三日ご来館ご鑑賞いただきました。

一般の応募数は往年に比べ減少しておりますが、会友・準会員の増加とともに、実力ある新人・若手が増えていることは好ましい傾向で、今後の活躍に期待したいと思えます。他会で活躍した方や長年独学で実力を蓄えた方が白日会を目指して出品、優れた成果をあげていることはここ数年の新しい傾向で、支部としても嬉しく思う次第です。

(絵画の一般入選18名のうち

新入選が9名)一方で、中部支部も高齢化が激しく、逝去、高齢などで退会・活動停止する方が増えました。とりわけ、

昨年石垣定哉常任委員のご逝去があり、今年は、長年中部支部の発展にご尽力いただいた草壁隆さんを見送ることになりました。その薫陶をいただいた私どもにとつてはまことに残念で、痛恨の極みにあります。このような傾向は今後も続くと思われませんが、上記の新人若手の活躍は目を見張るべきものがあり、その発展に期待しつつ、支部会員一同自身を叱咤しつつ新しい時代に向かつて頑張つて参りたいと思えます。

関西展

常任委員・関西支部長 池田良則

令和6年6月5日(火)〜11日(日)

あへのハルカス近鉄本店ウィング館8F
近鉄アート館

展示数 絵画…132点(通期74点(関西展での受賞者2名を含む)、前期29点、後期

29点)彫刻・17点 会場の広さに制限があるため、関西支部出品者の絵画に限り前期4日間、後期3日間に分け、前期、後期共103点を展示。会期中の展示替え29点は、百貨店の営業終了後に実施。

六月四日の陳列には中山会長、広田・中谷・寺久保常任委員にご来阪いただきまし

た。初日のレセプションでは中山会長より開会のご挨拶、近鉄百貨店相談役 高松啓二様よりご祝辞を頂戴しております。

関西展での受賞者には、読



▶ 関西巡回展ギャラリートークの様子

売新聞事業本部 天竺実代子様、ホルベイン株式会社 顧問 吉村信夫様より、表彰状の授与をしていただきました。

会期中には、例年通り四日間のギャラリートーク、色紙プレゼントの企画を実施。

ギャラリートークの講師は、初日、寺久保・中谷・広田常任委員、八日は大路副支部長、九日は松本貴子会員、十日は池田が担当。

今回、巡回作家の増員により、展覧会の質を向上させることができましたが、関西支部の出品者18名の陳列を見送る事態となり、当然、その方達の不満は残り今後の課題です。

関西展は百貨店で開催されるため、観客動員数が重要課題となります。

観客動員数は地元作家の展示数が影響すると思われたので、招待券の配布方法を次のように見直しました。

・招待券の枚数を細かく分け
・手元に残すことなく配り切る。
発送件数を増やす。

・あべのハルカスのある天王寺を中心に、美術部のある高校約50校に電話の上、学生に直接配布を依頼。

発送先の抽出や電話依頼は事務局長が取り組んでおります。

以上のように新たな策を試みましたが、昨年より202名減少し、5,933名となりました。

展覧会の質向上と同時に、動員数の増加を図るとい難題に直面しております。

受章のお知らせ

※夏の総会より

令和六年四月二十九日に春の叙勲が発令され、山本眞輔副会長が旭日中綬章を受章されました。



▶ 夏の総会後の懇親会にて花束贈呈される山本先生

選抜展報告

◆第10回 白日会テッサン展 永井画廊

令和5年11月1日～11日 (準公式選抜展)

◆第48回 三越会員選抜展 日本橋三越本店

令和5年12月20日～25日 (公式選抜展)

◆第2回 白翔会展 松坂屋名古屋店

令和6年4月10日～16日 (準公式選抜展)

◆第14回 白濤会展 あべのハルカス近鉄本店

令和6年6月5日～11日 (準公式選抜展)

◆第35回 明日の白日会展 日本橋高島屋

令和6年8月14日～19日 (公式選抜展)

◆第11回 白日会テッサン展 永井画廊

令和6年11月6日～16日 (準公式選抜展)

◆第49回 三越会員選抜展 日本橋三越本店

令和6年12月18日～23日 (公式選抜展)

「中山忠彦先生を
偲ぶ会」



この度逝去されました中山会長を偲び、白日会として、左記の通り偲ぶ会を開催いたす運びとなりました。開催にあたり白日会内外にご案内状をお送りし、返信ハガキにて出欠を頂きます。一般の方で偲ぶ会に参列を希望する方は、二月末までに、白日会事務所まで直接お問い合わせください。

日時 令和七年三月二十六日(水)

12時から14時まで

受付 11時15分より

場所 東京會館(丸の内)

三階 ローズの間

東京都千代田区丸の内3-2-1

☎03-3215-2111

会費 二万円

■誠に勝手ながらご香典ご供花ご供物はご辞退申し上げます。

■ご参列の際は平服にてお越しくださいませ。ようお願ひ申し上げます。

■ご参列いただきました皆様には特別図録「追悼―中山忠彦―」及び、中山先生の絵

皿(大倉陶園)を進呈致します。

総会概要

夏の総会（令和6年8月4日(日)）、秋の総会（同年11月10日(日)）両総会を合わせての決定事項を次の通りご報告します。

●会長代行について

11月10日の秋の総会にて齋藤秀夫副会長が会長代行に就任しました。

●101回展について（特別陳列・内覧会・レセプションパーティーについて）

第5室にて特別陳列「追悼—中山忠彦—」を行います。中山会長の代表的作品およそ20点を陳列予定です。

また3月19日は内覧会（出品者と招待者のみの入場）とし「研究団体」としての意義を十分に発揮させるものとします。同日、支部長会議と授賞式を行います。その後に講堂にてレセプションパーティーを行う予定でありましたが、中山会長の喪に服するという意味もあり今回は行わず、102回展より開催予定です。

●審査員

先の常任委員会にて、101回展の審査員を決定しました。（常任委員は全て審査員）
 絵画：常任委員のみ 彫刻：坂本健（会員） 永江智尚（会員）

●特別図録と絵皿の作成

通常図録とは別に「追悼—中山忠彦—」として特別図録を制作します。特別陳列作品を中心としながら、中山先生の業績を紹介顕彰し、先生と所縁の深い方々の追悼文と、白日会内部からの追悼文、およそ百名からの「言の葉」を集めたものとなります。また昨年の記念絵皿と対となるような中山先生の絵皿（大倉陶園）を作成しており、偲ぶ会にご参加の方を対象にご用意しております。（偲ぶ会不参加の場合は有料となります）

●偲ぶ会について

3月26日(木)に東京會館において偲ぶ会を開催いたします。在籍者各位にはお知らせを送りますので、同封の出欠ハガキにてご返答ください。（参加は任意となります）詳細は本会報5頁を参照ください。

第101回白日会展スケジュール

3月9日(日)	10日(月)	11日(火)	12日(水)	13日(木)	14日(金)	18日(火)	19日(水)	20日(木)	25日(火)	26日(水)	27日(木)	31日(月)	1日(火)
搬入	搬入	鑑審査(入落審査)	鑑審査(賞選定(会賞)、推挙)・発表事務	部屋割り・陳列準備	名札 / 作品移動	陳列・賞選定(特別賞、法人寄託賞) / 巡回展選抜展選抜	内覧会・研究会・支部長会議・授賞式	初日 / 選外搬出	休館日	中山先生を偲ぶ会(東京會館)	公開クロッキー講座	閉会(15:00) / 作品撤去	搬出 (4月2日(水) 彩美堂業者搬出)

会期：令和7年3月20日(木)～31日(月) 会場：国立新美術館2F (2A・2B・2C・2D)

事業計画表

令和7年	2月	3月	4月	6月	7月	8月	9月	12月
9日	20日～31日	8日～13日	9日～15日	4日～10日	6日(予定)	日付未定	7日(予定)	日付未定
研究会(日展会館)	白日会展(国立新美術館) ※詳細は左記参照	名古屋巡回展(愛知県美術館ギャラリー)	名古屋選抜展(松坂屋名古屋本店本館第一美術画廊及び第二美術画廊)	近鉄選抜展(あへのハルカス近鉄本店タワー館美術画廊)	研究会(日展会館)	総会(上野精養軒)	研究会(日展会館)	三越選抜展(日本橋三越本店)

創立百周年記念展受賞者推挙者一覧

※は100回展より新設

特別賞

内閣総理大臣賞 牧内 則雄 (絵画) 愛知
文部科学大臣賞 中谷 晃 (絵画) 千葉
SOMPO美術館賞

中澤弘光賞 宇田川 格 (絵画) 埼玉
有田 巧 (絵画) 東京
富田温一郎賞 河野 建作 (絵画) 千葉

(副賞平澤篤賞)
吉田三郎賞 坂本 健 (彫刻) 熊本
伊藤清永賞 中山 忠彦 (絵画) 千葉
平松讓賞 熊澤 真紀子 (絵画) 神奈川

会員賞 吉成 浩昭 (絵画) 東京
創立百周年記念賞 中山 忠彦 (絵画) 千葉
創立百周年記念賞 中村 晋也 (彫刻) 鹿児島

八咫鳥賞 五月女 政巳 (絵画) 栃木
久恒 廣義 (絵画) 東京

第50回展会友推挙

会賞

白日賞 鈴木 亜麻 (絵画) 大阪

(副賞ホルベイン賞)

白日賞 二木 ゆき子 (絵画) 山口

(副賞クサカベ賞)

白日賞 佐々木シユウジ (彫刻) 大阪

準会員奨励賞 田中 真季 (絵画) 熊本

(副賞マツダ賞)

準会員奨励賞 井口 和夫 (絵画) 大阪

(副賞シユミンケ・ラフアエル賞)

準会員奨励賞 谷口 重人 (彫刻) 鹿児島

会友奨励賞 田丸 佳子 (絵画) 愛知

一般佳作賞 伊藤 春樹 (絵画) 長野

一般佳作賞 川路 桐耶 (絵画) 熊本

一般佳作賞 瀬川 洋文 (絵画) 東京

一般佳作賞 友利 郁也 (絵画) 千葉

一般佳作賞 仁木 聖子 (絵画) 北海道

一般佳作賞 田淵 智哉 (彫刻) 鹿児島

法人寄託賞

【百貨店賞】 近鉄百貨店賞 吉間 春樹 (絵画) 千葉

*高島屋賞 津絵 太陽 (絵画) 東京

*大丸松坂屋百貨店賞 友利 郁也 (絵画) 千葉

【画廊賞】

梅田画廊賞 三箇 大介 (絵画) 兵庫

関西画廊賞 中島 健太 (絵画) 神奈川

大有美術賞 朝永 丁心 (絵画) 愛知

美岳画廊賞 松崎 夏実 (絵画) 千葉

ギャラリー大井賞 松本 貴子 (絵画) 奈良

瀧川画廊賞 大沼 紘一朗 (絵画) 埼玉

ギャラリーアーク賞 田中 真季 (絵画) 熊本

●会員推挙

【絵画】

浅尾 順子 東京

井口 和夫 大阪

稲垣 晴代 東京

岩崎 喜美子 栃木

岩本 将弥 福岡

植村 千尋 三重

大窪 ひとみ 広島

大根田 登美子 栃木

小野 大輔 長崎

加藤 久子 岡山

鎌谷 卓之 大阪

岸浦 有希 埼玉

河野 建作 千葉

児島 慎太郎 岡山

小林 久代 静岡

コルドバツチェ・マンス ー 東京

佐藤 真衣子 東京

城代 成美 長崎

新藤 則子 静岡

杉若 秋津 愛知

高橋 和正 埼玉

田中 真季 熊本

徳永 敏 鹿児島

長尾 圭子 千葉

中島 みどり 宮城

中西 令 大阪

中山 富志男 北海道

中山 十六 岡山

【彫刻】

鍋田 忠彦	西澤 美幸	服部 としこ	船田 昌宏	丸山 孝子	宮崎 宗人	村社 由起	元田 太	八木 誠一	吉田 幸子	渡邊 裕榮	谷口 重人
静岡	長野	愛知	栃木	東京	神奈川	京都	神奈川	静岡	青森	長崎	鹿児島

● 準会員推挙

【絵画】

赤堀 祐子	芦田 宏平	足立 良子	伊藤 英二	伊藤 大悟	稲垣 元子	岩本 澄子	大塚 麗子	帯金 正子	貝原 豪	川越 誠	河菜 直子	久野 喜義	佐伯 弘子	佐々木 君江
静岡	兵庫	栃木	北海道	埼玉	三重	静岡	愛知	静岡	長野	東京	広島	愛知	千葉	岩手

【彫刻】

沈 堅毅	鈴木 伊佐男	妹尾 均	園田 保博	玉木 充	田丸 佳子	長 和義	長友 洋子	西川 誠一	野々山 耕	福澄 明美	松尾 佳昭	村上 紘一	山下 保美	山根 かほる	吉村 瑞紀	佐々木 シュウジ
東京	埼玉	岡山	大分	岐阜	愛知	栃木	宮崎	熊本	愛知	三重	東京	岩手	栃木	山形	長崎	大阪

● 会友推挙

【絵画】

伊藤 利春	伊藤 春樹	大野 陽子	奥平 英二	加藤 貢	川路 桐耶	北村 正敏	木村 喜孝	熊谷 佳子	香焼 直美
山形	長野	大分	三重	北海道	熊本	山形	栃木	東京	千葉

【彫刻】

駒田 穂	下川 多佳子	庄 道子	鈴木 亜麻	瀬川 洋文	赤 政継	高森 圭子	友利 郁也	豊浦 由子	中村 壽子	仁木 聖子	西澤 敏造	濱本 哲也	平山 優希	二木 ゆき子	松崎 夏実	松村 盛仁	的場 好夫	水落 明	弓山 俊一	吉川 温季	吉田 亮子	吉野 仁太郎	好村 直行	汪 洪廷	該当者なし	
愛知	奈良	東京	大阪	東京	神奈川	宮城	千葉	大阪	長崎	北海道	静岡	兵庫	長崎	山口	千葉	熊本	千葉	栃木	栃木	愛媛	長崎	北海道	青森	神奈川	千葉	

特別賞審査員

内閣総理大臣賞 瀧 悌三先生
 文部科学大臣賞 土方 明司先生

受賞作品紹介

特別賞

内閣総理大臣賞

牧内則雄



尾張半田山車勢揃い
180 × 115cm

文部科学大臣賞

中谷晃



瑞花の庭園
F 100

SOMPO美術館賞

宇田川格



a little story
P 100

中澤弘光賞

有田巧



雛日誌
F 100

富田温一郎賞 (副賞平澤篤賞)

河野建作



保護猫
154 × 219cm

吉田三郎賞

坂本健



風待
93 × 74 × 65cm

伊藤清永賞
創立百周年記念賞

中山忠彦



青衣立像
P 100

平松讓賞

熊澤真紀子



室内
F 100



怠惰で優雅な日
F 130

会員賞
吉成浩昭



善財童子
83 × 26 × 22cm

創立百周年記念賞
中村晋也



響き
P 100

八咫鳥賞
久恒廣義



活きる
F 100

八咫鳥賞
五月女政巳

会賞



還元・θάνατος
112 × 40 × 45cm

白日賞
佐々木シユウジ



猫の居場所
F 100

白日賞 (副賞クサカベ賞)
二木ゆき子



Appreciate
F 100

白日賞 (副賞ホルベイン賞)
鈴木亜麻



双眸II
70 × 45 × 30cm

準会員奨励賞
谷口重人



溪谷秋景
F 100

準会員奨励賞
(副賞シュミンケ・ラファエル賞)
井口和夫



威風堂々
F150

準会員奨励賞 (副賞マツダ賞)
ギャラリーアーク賞
田中真季



浴室
F 100

一般佳作賞
川路桐耶



舞の道
145 × 109cm

一般佳作賞
伊藤春樹



装い
F 100

会友奨励賞
田丸佳子



着物を楽しむ
M 80

一般佳作賞
仁木聖子



Aquamarine
S 50

一般佳作賞
大丸松坂屋百貨店賞
友利郁也



冬日和
P 100

一般佳作賞
瀬川洋文



界
F 100

高島屋賞
津絵太陽



花とカフカ
P 100

近鉄百貨店賞
吉間春樹

法人寄託賞
【百貨店賞】



『会』の刻
178 × 130 × 61cm

一般佳作賞
田渕智哉



ぼやけた底
F 100

美岳画廊賞
松崎夏実



匿名の地平線 — ver. monochrome —
P80

関西画廊賞
中島健太



夕日ヶ浦
M 120

【画廊賞】
梅田画廊賞
三箇大介

大有美術賞 朝永丁心



花筵
P 100

ギャラリ―大井賞 松本貴子



Pandora
P 100

瀧川画廊賞 大沼紘一朗



意志
M 120

50年前の白日会と百回展

今から五十年前のことです。白日会は創立五十周年の記念展を開催し、東京都美術館にて出品者の力作群（総数630点・絵画580点・彫塑50点）が陳列され、創立会員中澤弘光の生誕百年を記念する特別陳列がされました。また当時大変高価であったカラー図録（会員のみ）の制作もされ、そして上野精養軒で多くのご来賓招待者を迎えて祝賀会が行われました。

左記に白日会五十年記念の図録に掲載された挨拶文を記します。

（白日会の記名であるが、伊藤清永前会長によるものである）



「いあいさつ」

今より半世紀前、時あたかも関東大震災で東京は焦土と化し、人心もまた動揺の極に達していた翌大正十三年、絵画・彫刻の俊鋭作家によって白日会は創立されたのであります。以来幾星霜、めでたくここに五十年を迎えることになりました。当時わずか18名によって発足した本会も今や400有余を

数えるに至ったのであります。大正から昭和へ、そして戦争という大きなあらしを、終戦・戦後という激動の世を、まいました。こうしてある時は細くある時は太く芸術という大河の本流を求めて年を重ねたのであります。

創立に当られた先生方の多くは既に故人となりましたが、後輩の指導・会の発展に常に中心的存在となつて多大の尽力をされたのであります。またしづかにふり返ってみますとその間、会の活動の内々に外に支援して下さつた多くの方々の力を忘れることは出来ません。

「歴史はただ長いだけでは誇りになりませんね。内容の充実も心掛けて積み重ねていかなければ……」創立会員中沢弘光先生が生前語られたことをいま襟を正す気持ちで思い出します。本年はこの日本洋画壇の大先輩である中沢先生の生誕百年に当り、本展で記念特別陳列が出来ますことはまことに光栄で意義深いものがあります。

わが白日会はあわただしい画壇の動きに左右されず一貫した姿勢で芸術の道を追究してきました。この累積された五十年の歴史を基盤として今日より新しいスタートを切ります。幸い新進精鋭の若手作家の数も多く、会の前途はますます明るく甚だ力強いものがあります。本展を期しわれらは更に新しい熱意をもつて白日の精進を誓うものであります。

終りに本展開催に当り特別の御尽力をいただきました西川寧先生・田近憲三先生・三木多聞先生・中沢家をはじめ広告掲載の方々・光村原色版印刷所並びに関係各位に深く感謝の意を表する次第であります。

昭和四十九年三月 白日会



文中の五十年を百年と置き換えることも可能かと思えます。当時とほぼ同様の理念と意義の延長上に100回展を迎えられたのは、伊藤前会長と中山会長がそうした白日会の機軸を貫かれたおかげであります。さらに本100回展は、当会の綿々と連なる歴史をある程度視覚化して現在に伝えられたのではないかと思えます。白日会は五十年後も百年後も先達の遺志を受け継ぎ「芸術という大河の本流を求めて」いることを願います。

※1 奇しくも五十年後に、やはり中澤弘光の嫡孫の中澤充伸様と女孫で版画家の三井弦様のご厚意で、特別陳列「白日会百年の軌跡」の中で、中澤弘光先生誕百五十年のコーナーを開設できました。

※2 西川寧は二十世紀を代表する書家とされ、昭和の三筆と呼ばれた。白日会五十年記念展の図録の表紙（左頁図参照）に揮毫された。その「白日会」の部分を利用して現在の白日会の封筒等の媒体に使用している。西川加那子特別会員の父。

※3 田近憲三は美術評論家で近代西洋絵画の著作多し。

※4 三木多門は国立近代美術館館長。



五十年に亘って在籍された方に授与される八咫鳥賞。この度受賞された絵画部の二名の方は白日会五十年記念展にて会友推挙となられました。受賞者の皆様へ受賞にあたり思い思いの内容でと、ご寄稿をお願いしました。



五月女政巳（会員） 50回展会友推挙



「白日会とともに」

物心ついた頃、目の前にはキャンパスに向かう父の姿が^{※5}あった。

将来の自分を考えはじめた頃、周囲の空気に押されるように美大へと進んだ。入学当時は抽象絵画ブームが日本に上陸して間もなくの頃で、具象絵画を否定する動きが強かった。

卒業後は仲間達の就活の流れの中で美術教師の試験を受け採用が決まってしまった。

数年後、教師の仕事だけでは終わりにくくない一心で白日会に出品し、その時から50年が過ぎてしまった。

当時の白日会は伊藤清永先生を中心に若く勢いのある先輩方が周囲を固め、研究団体としての歩みを再スタートさせていた頃だったと思う。今振り返ると凄いメンバーが終結していたものだと感じる。

白日会の思い出は沢山あるが、上野の都立美術館で開催していた頃、展示が一通り終わると伊藤清永先生が様子を見ながら会場をひとまわりする。私は先生が私の作品の前に来るのを見計らいながらジ〜と待ち、タイミングを合わせて「ご指導よろしくお願いします」と頭を下げる。先生は、「しっかりと見て描きなさい。いい加減に描くな。挑戦しなさい。」など鋭い視線で言われ、そして厳しい言葉のすぐ後に暖かな表情をされた先生の眼差しは今でも鮮明に脳裏に刻まれている。

当時の白日会は具象絵画団体の中でも現在程には大きく力のある団体ではなかった。今、有能な若手作家を多く抱え他の団体をリードする程立派な団体になったのも中山忠彦会長はじめ沢山の先輩方の努力が実った結果だと思う。

作品と真摯に向き合い描く姿勢は父を見て学び、絵画世界の深さ広さは学校で学び、そして共に制作する仲間の大切さを白日会で学び今日があると感じている。

私も残り何年、あと何枚描けるかわからないが、少しでも多く記憶に残る作品を・・・と思っている。

今回の白日会創立百周年記念展において節目の八咫鳥賞をいただけただけの幸運に感謝します。

※5 父は洋画家の五月女政平（1921〜2014）白日会会員・栃木支部長を務める

久恒 廣義（会員） 50回展会友推挙

「八咫鳥賞を受賞して」



このたび、白日会百周年記念展にて特別賞八咫鳥賞を思わずも受賞し光栄に存じます。

私事ですが、今から60年前、郷里の大家であり大先輩の現白日会会長 中山忠彦先生により前会長 伊藤清永先生の絵画研究所をご紹介頂き、デッサンに油絵と美大受験に通い、美大卒業後、教職に就きその年より白日会展に出品し始め50年が過ぎました。

その百周年の記念展に白日会のシンボルの八咫鳥賞を頂き、初心に返り制作に励んでいきたいと思えます。昨年とは心臓手術で3カ月の入院となり病み上がりですが、これからも健康第一で制作に頑張ります。今後共何卒宜しくご指導の程、お願い申し上げます。

色々大変ありがとうございました。



▲ 白日会五十年記念展図録の表紙 西川寧 筆 (右頁※2参照)

百周年展アルバム

特別陳列—白日会百年の軌跡—



授賞式



▲ 会長挨拶



▲ 伊藤清永賞と創立百周年記念賞を受賞する中山会長

初日・テープカット



◀ 左から斎藤副会長、中澤允伸様（中澤弘光お孫様）、中山会長、国立新美術館長・逢坂恵理子様

ギャラリートーク



▲ 山本副会長と池川常任委員のギャラリートーク

陳列後—作品を前に 中山先生、若手と語る—



▲ 亀山裕昭会員と中山会長

祝賀会



◀ 祝賀会の日は中山会長の89歳の誕生日でもあり、祝賀会終了直後に皆で会長と奥様を囲みハッピーバースデーの歌を歌いました。



▲ 吉間春樹会員と中山会長



▲ 祝賀会終了後の集合写真（中央に中山会長と奥様）

公開クロッキー



▲ イベント終了後の中山会長、出演者とモデルさん



▲ 実演の様子（出演者：津絵太陽）

ことの葉

特別陳列や記念カタログで公開の叶わなかった先達の記録を、会報内に「ことの葉」として紹介する場を設けました。今回は富田温一郎賞の由来であります、創立会員・富田温一郎の史料をご紹介します。



創立会員の富田温一郎は明治二十年（1887）、新潟に生まれた。東京美術学校では同じく創立会員の小寺健吉、鈴木良治、鈴木英雄、第3回展から参加した大久保喜一と同級で、一つ上の学年に、岡本一平、近藤浩一路、池辺鈞の創立会員があり、第3回展から参加した香田勝太と同級生であり、なおこの学年には藤田嗣治があった。

彼らが青春時代を送った明治期末から西洋近代絵画が次々と紹介され、大正時代に入ると二科展と院展が文展から分離し画壇は混迷を来した。しかし日本は明治の不平等条約も改正し国際連盟の常任理事国となり、世界の列強国と肩を並べるに至った。白日会の創立会員はそうした時代の中で、西洋に学びながらも西洋に対し批判的な精神も持ちあわせた上で、もつと根本的なところを研鑽する「研究団体」を構想して、関東大震災を乗り越えて白日会を結成したのであった。大正十三年一月の結成に向けた準備会議は上野谷中の富田温一郎宅で行われた。富田37歳の時であった。

富田温一郎は、光風会第1回展に出品し有望新人に与えられる今村奨励賞を受賞、その頃に、黒田清輝に師事し帝展と光風会の中堅中核にいた中澤弘光と知り合い、以降中澤に兄事した。中澤弘光は陣頭指揮を執るタイプでは無かったが、富田が中澤の意向を

汲んで白日会を指導した。創立そして公募展として踏み切った第2回展以降から軌道に乗せ、戦時と戦後復興の中、富田は常に白日会の中心にあった。この体制は富田が亡くなる第30回展（昭和二十九年・1954）まで続いた。中澤を継ぎ戦後日展の会員として将来が期待された富田が67歳で逝去したことは、大きな痛手であった。伊藤清永前会長や中山忠彦会長が語った、白

日会の最もどん底だった時がこの時であった。下記は、富田温一郎が昭和九年（1934）に、白日会リーフレット（会報）に掲載した文章であるが、富田温一郎（当時47歳）の信念と共に、当会の精神の系譜や制作への心構えを鑑みることができるとは思われるので紹介したい。

傾向

富田温一郎

巨匠セザンヌが林檎のしかも人の顔もつまりは一つことだと一元的態度を示して此の方、彼の真意を誤って浅薄な見解から却って我等が伝統的東洋人特有の感情を放棄し、単なる物質的形体、様式のみで終始する個性なき技法に専念することにより、近來いづれの展覧会も千篇一律、無味乾燥の傾向を辿るばかりであることは作家に取っても又観衆に取っても不幸の極みである。

偶々力作なるものは徒に膨大にして不謹慎不遜であり、製作の動機、目的が奈邊にあるやを解し得ない。あるいは未完成の美を誇り、その帰趨を明かにせず無責任の態度に出づる者いづれにもせよ、幾多の後進を誤り、引ては我国美術進展の上にも多大の障害を齎すことは正に時流とはいえないながら一面現在画壇の要職に在る人々が多かりにも誤まれる選択によって美術ならぬ美術を奨励するの反映ではあるまいか、兎にも角にも現状の如き情勢の続く限り到底良き藝術は芽生え良き作家の登場を促すことは木に魚を求むるに似て前途の寂寥を痛感すると共に暫く傍観のほかはあるまいと考えるのである。

昭和九年十一月二十七日



◀ 白日会リーフレット 昭和九年十二月十日発行 8・9・10合併 編集兼発行人 村上鉄太郎

追悼のことば

今年の九月に逝去されました中山会長をはじめ、昨年度より、白日会にとって大きな存在でありました会員の方々が多く逝去されました。中山会長の追悼は、101回展にて追悼文集付きの特別図録を作成いたします。

ここでは、昨年度までに逝去された会員の方々の追悼文を掲載させていただきます。

■ 阿方稔（顧問・元常任委員）



会員推挙 56回展

内閣総理大臣賞 61回展

中澤賞 74回展

令和五年十一月二十二日逝去 享年87歳

阿方先生は、第56回展（昭和五十五年・1980）に初出品で会員推挙となり、第

61回展（昭和六十年・1985）で内閣総理大臣賞を受賞されました。伊藤清永前会長が会則改定の上で白日会会長に就任し、新機軸の路線を推進され始めたのがちょうどこの時でした。伊藤前会長は現在の常任委員制度を敷かれ、中山忠彦先生や野田弘志先生という当時50歳前後の作家を運営の中枢に据え、美大卒業間もない若手作家を白日会に積極的に勧誘するなどの施策を始めました。阿方先生は当時の東京造形大学の教授職にあり、東京造形大学の出身者や美大受験予備校の代々木ゼミナールの講師をされていた教え子たちを誘い、若手作家が集う白日会という、現在に続く当会の指針の点火薬となり、その基盤づくりに大いに貢献されました。

阿方先生の教え子を代表して、有田巧常任委員より、追悼のご寄稿をいただきました。

阿方先生の事

常任委員 有田巧

阿方先生は、入学した東京造形大学の教授だった。その頃、大学の研究室で制作している先生は、阿方先生と版画の先生の二人だけだった。

石膏とボンドを混ぜ画布に大きなヘラで大胆にマチエールを作り、その上に最初のイメージを写真製版のシルクスクリンで刷り込む制作方法だった。大作だったため、学生も時々手伝った。

その後、形や量感をつくる肉厚のマチエールは残ったが、写真製版によった具体的な形は消えていった。最初の制作のイメージは具体的で、船のシルエットであったり、刀であったりすると聞いたことがあるが、自然の中に見つけた具体的な形は、描くほどに消えて不明瞭になるが、それに対して彩色した思いつきりのいい肉厚のマチエールは、量の重みは感じなくなる。

卒業して大学の非常勤として通うようになった頃、阿方先生の引率で、ヨーロッパ9カ国22日間の海外研修に助手として参加した。初めての海外であった私は、どの国も、どの都市も、どの美術館や教会も新鮮だった。

オランダ政府給付留学生として留学していた先生は、オランダの美術館館長の推薦でスキダム市立美術館で個展をした事、伊藤清永（前）会長が、アムステルダムに滞在され、オランダ国立美術学校で裸婦の制作をされたときの事など、この旅行中に聞いた。

白日会に所属されていた先生は、毎年、学生や卒業生を5〜6名、白日展に出品を誘っておられた。私もそのひとりだが

毎年若い出品者が増えて行き、他の美大にも繋がり若い元気な作品が会場に並ぶようになった。やめていく人も多かったが、若い人の大きな作品を中心とする展示室ができるようになり、それは今も続いている。

常任委員の任期が終わり顧問になられる頃、もう一度ヨーロッパを廻りたいと地図を広げて計画を立ててみたが、もう体力が続かないことに気がついたらと残念そうに笑っておられた。

今頃、ヨーロッパのどこかの美術館をゆっくり廻っておられる事だろう。

阿方先生はいつも青年であった。ご冥福をお祈りいたします。



▲ 第九十五回記念展（2019）「過ぎ去ったあの日」 F100

乙黒久先生と草壁隆先生は、白日会の戦後復興が軌道に乗るまでの苦しい期間に多大なご尽力を頂き、そのご功績により特別会員となられました。なお、第95回展会報にて、乙黒先生と草壁先生の八咫烏賞受賞の際のお言葉を拝読することができませんので、是非ご参照ください。(ホームページにも掲載されています) お二人のご冥福をお祈り申し上げます。

■ 乙黒久 (特別会員)



会員推挙 38展
 中澤賞 68回展
 内閣総理大臣賞 72回展
 八咫烏賞 95回展
 令和五年三月逝去 享年 95歳



▶ 第72回白日会展 (1996)
 内閣総理大臣奨励賞「新府春韻」

乙黒久先生が初出品されたのは、中山先生と同じ第31回展(昭和三十年・1955)で、乙黒先生の師匠は百回展の特別陳列で紹介した広本了先生でした。乙黒先生は、平明ながらも洋画として格調ある落ち着いた風景画を描かれ、特に信州地方では、施設や店舗で乙黒先生の作品を見かけることがあるそうです。また笹口淳先生の事務所時代(およそ45回展から60回展時)に精力的に事務業務のお手伝いをされました。

■ 草壁隆 (特別会員)



会員推挙 39回展
 中澤賞 92回展
 八咫烏賞 95回展
 中部支部長 2000年〜2010年
 令和六年一月三十一日逝去 享年 95歳

草壁隆先生が初出品されたのは、第36回展(昭和三十五年・1960)で、草壁先生の師匠は戦前から出品されていた会員の岩月光金先生でした。草壁先生は岩月先生のデッサン指導に基づきながら、清静静謐な人物画の世界を探索され続けました。また草壁先生は伊藤清永前会長のご指示の元、名古屋巡回展の立ち上げ(昭和三十九年・1964)に大きな役割を担い尽力されました。



▶ 第92回展 (2016) 中澤賞 「或る午後(ソリスト)」 P100



展覧会記録 個展・主なグループ展

令和五年九月

石垣・竹富島紀行

横濱 仲通りギャラリー

岡田高弘 広田稔 佐藤陽也

第2回油彩クロッキー展

横濱 ギャラリーミロ

岡田高弘 広田稔 佐藤陽也 杉本幸江 白田彩乃

四つの視展

セントラルミュージアム銀座

岡田高弘 広田稔

横濱再発見！ーアトリエ21三人展ー

横濱高島屋

岡田高弘 広田稔

第45回記念北海道ロビー絵画展

新宿ギャラリーー絵夢

高梨芳美 神山晃一

木原和敏展

千葉森の美術館

吉成浩昭展

山形県芸文美術館

沖津信也 個展

銀座 SASAI FINE ARTS

植野綾展

2023 白日星の会

青山田島美術店 AOYAMA

今利美咲 小林聡一 佐々木剛 佐藤陽也

嶋中俊文 鈴木真治 永田和之 茅原佳介

廣瀬順子 柳田也寿志 山下あゆ美 山本健

白日会岡山支部次世代三人展

岡山天満屋

北川直枝 佐藤孝洋 椿苑

長船善祐 油彩画展

岩手ギャラリーカワトク

関口雅文 油彩展

小林聡一 油絵展

小野月世展

こう、こう、こう

「私の横浜」展

2023・吉田直未 作品展

2023 十月

秋田ギャラリーあい

三澤忠展 長野県中野陣屋・県庁記念館

永田和之 油絵展

久保尚子展

第6回 皎の会

熊谷有展 寺久保文宣 広田稔 木原和敏 児玉健一

関口雅文 堀井聰 山本桂石 和田直樹

佐藤洋子 絵画展

池田茂 個展

原太一 油彩画展

100枚のクロッキー展

横濱 FEI ART MUSEUM YOKOHAMA

長船善祐 油彩画展

徳田明子 水彩画展

吉間春樹展

令和六年一月

鹿兒島大学 退任記念 池川直と教え子たち

ちの彫刻展

長船善祐 油彩画展

十二月

中央区 美岳画廊

銀座 SASAI FINE ARTS

鹿兒島市立美術館

山口井筒屋

山口井筒屋

山口井筒屋

山口井筒屋

山口井筒屋

山口井筒屋

山口井筒屋

山口井筒屋

山口井筒屋

山口井筒屋

山口井筒屋

山口井筒屋

山口井筒屋

山口井筒屋

山口井筒屋

山口井筒屋

山口井筒屋

山口井筒屋

山口井筒屋

山口井筒屋

山口井筒屋

山口井筒屋

山口井筒屋

山口井筒屋

山口井筒屋

山口井筒屋

ソレイユブラン

朝日夏実 有川敏郎 苛原治 岩本将弥 大路誠

小野彩華 小野月世 亀山裕昭 河菜直子 口澤弘

黒木ゆり 児玉健二 小林聡一 三箇大介 鈴木真治

津笑実陽 徳田明子 西脇恵 真島稔 松林淳 村上ゆたか

長船善祐 油彩画展

和泉直樹展

8人のみかた 8人のしせん 8人の油画展。

和泉直樹展

8人のみかた 8人のしせん 8人の油画展。

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

中央区 美岳画廊

朝日夏実 有川敏郎 苛原治 岩本将弥 大路誠

小野彩華 小野月世 亀山裕昭 河菜直子 口澤弘

黒木ゆり 児玉健二 小林聡一 三箇大介 鈴木真治

津笑実陽 徳田明子 西脇恵 真島稔 松林淳 村上ゆたか

長船善祐 油彩画展

和泉直樹展

8人のみかた 8人のしせん 8人の油画展。

和泉直樹展

8人のみかた 8人のしせん 8人の油画展。

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

和泉直樹展

六月

長船善祐 油彩画展

鹿兒島 山形屋画廊

長谷川晶子 展

長崎浜屋

廣瀬順子 展

十月

宮崎ギャラリー石蔵

川野昌子 油絵展

銀座ギャラリー杉野

徳丸晃 風景画展

宮崎ギャラリー石蔵

かくかく展

横濱 仲通りギャラリー

水彩セッション2024

大丸東京店

長船善祐 展

福岡ディーキューブギャラリー

原太一 個展

松坂屋上野店

宇田川格

横濱 ギャラリーミロ

大友義博 小野月世 徳田明子 村上ゆたか

杉若秋津ーNext Oneー

Akira Tokumaru Exhibition

宮崎ギャラリー石蔵

福井欧夏 展

横濱 art Truth

大平嘉和 納純 佐藤陽也

西沢貴子 吉住裕美 吉成浩昭

名古屋ギャラリー彩

第6回アルナイルの会

大阪ギャルリ VEGA

植野綾 大作展

熊本 RESTERS BED&CO.

池田良則 高梨芳美 久保尚子 河野桂一郎

児玉健一 三箇大介 西谷之男 山本桂右 李曉剛

第5回 阿佐美展

新宿 ギャラリー絵夢

今利美咲 個展

松坂屋上野店

有田巧 フレスコ画展

香川イノウエ商会

第5回 阿佐美展

新宿 ギャラリー絵夢

高梨芳美 西谷之男

吉田直末の世界

秋田ギャラリーあい

池川直彫刻展

長船善祐 油彩画展

丸善・丸の内本店

山形ギャラリーナナビーンズ

油彩クロッキー展 vol.3

第10回記念まほろば 佐久に咲く素描展

新宿 ギャラリー絵夢

世田谷区平成記念美術館ギャラリー

吉野川市芸術祭

第20回総合美術展

中山忠彦 有田巧 池田良則 大友義博

岡田高弘 熊谷有展 高梨芳美 寺久保文宣

夏の徳島紀行

横濱 仲通りギャラリー

中山忠彦 展

日本橋高島屋

花と実

伊勢田理沙・植野綾・吉間春樹

岡田高弘 展

横濱 仲通りギャラリー

久保尚子 展

大阪あべのハルカス近鉄本店

池田良則 展

三人展

銀座 SASAI FINE ARTS

植野綾 展

銀座 SASAI FINE ARTS

関口雅文 展

大阪梅田画廊

大沼絃一朗 油彩画展

山形恵埜画廊

bouquet

伊勢田理沙 植野綾 吉間春樹

第46回北海道ロビー絵画展

新宿 ギャラリー絵夢

関口雅文 油絵展

日本橋三越本店

長船善祐 油彩画展

福岡三越

斎藤秀夫 油絵展

京王百貨店新宿店

亀山裕昭 展

日本橋三越本店

第7回 咬の会

大阪梅田画廊

津絵太陽 展

日本橋高島屋

折りく 長崎からのメッセージ

京王百貨店新宿店

第7回 咬の会

大阪梅田画廊

中山忠彦 展

高島屋大阪店

高島屋京都店

日本橋高島屋

斎藤秀夫 油絵展

京王百貨店新宿店

第7回 咬の会

大阪梅田画廊

津絵太陽 展

日本橋高島屋

※紙面の関係上、会員の個展及び主なグループ展のみの掲載となっておりますが、ご了承ください。

お知らせ

春の研究会

令和七年二月九日(日)

10時～終了次第 受付 9時45分～13時
参加費 一人五千円(昼食等含む)・見学も同様
会場 日展会館 東京都台東区上野桜木二丁目一
電話 〇三三三八二一〇四五三

【交通のご案内】

JR「鶯谷駅」北口より徒歩五分・地下鉄
千代田線「根津駅」より徒歩一五分

※二階受付順となりますのでご了承ください。

※日展会館には駐車場はありません。車でご来場の方は必ず近くの有料駐車場に駐車してください。

創立百周年記念展の記念品の販売

100回展にて作成しました記念品(特別図録・絵皿)を数量限定ではありますが、左記の価格にて販売いたします。詳しくは白日会事務所まで。

記念カタログ：二千円 絵皿：八千円
(送料含む)

事務所の窓口対応時間について

白日会事務所は現在業務時間を短縮させており、電話等の窓口は平日の10時半～15時半までとなっております。

※水曜日は不定期となります。

時間外のお問い合わせは白日会メール、またはFAXをご利用ください。

ホームページの展覧会掲載について

白日会ホームページにある展覧会情報「個展・グループ展他」のページに掲載をご希望の在籍者は、白日会事務所まで展覧会のDMを郵送またはメールにてお送りください。尚、掲載には数日みていただくと共に、郵送の場合は発送から到着まで日数がかかりますので、会期が近づいている場合はなるべくメールをご利用ください。

住所変更時のお願い

住所の変更がありましたら、早めに白日会事務所までお知らせ下さい。住所録に反映されるのは二月半ばまでに届けられた住所となり、出品票に記入した住所は翌年の住所録に反映されます。

訃報

阿方 稔(顧問) 令和五年十一月逝去
長澤和子(会員) 令和五年十二月逝去
草壁 隆(特別会員) 令和六年一月逝去
中山忠彦(会長) 令和六年九月逝去
吉田幸子(会員) 令和六年十二月逝去
丸山 勉(元常任委員) 令和六年十二月逝去

注・丸山勉氏は令和六年十一月十日に白日会を退会

※訃報の掲載は会員のみとなります。

編集後記

今回、会報の発行が例年よりかなり遅れましたことをまずはお詫びいたします。

ここ十数年の間、色々なことがありました。第87回展は東日本大震災と重なり、第91回展は日展が、そして当会も社会的に大きな非難を浴びた中で開催、96回展では展示するもコロナ禍で一般公開が叶わず、渦中にあった白日会はもとより他団体さらには美術界全体へと多難な事態が次々と押し寄せました。また公募団体の高齢化と油彩画を描き彫刻を造り団体展に出品しようとする層の大きな減少が歴然としてきました。このような世相の中、白日会は一応堅調に奮戦しているとのご評価を頂くことも多くなりましたが、同時に事務的な機能がしつかりしているのではないかと誤解も受けております。白日会は現在、平常事務運営に加え記念事業の運営、対外的な動画やホームページ、媒体物、会報等をほぼ外部に委託せず、会内部のごく少人数が兼任して行っております。昔、伊藤清永前会長は「白日会は貧乏な会ですから……。」とよくご挨拶の場で申しており、今も尚その状況は変わりなく、白日会は「お仲間によるお手製の会」と言っても過言ではありません。言い訳めいておりますが、この場をお借りして皆様には多々不備の

あることを改めてお詫び申し上げます。とはいえ、どこまでも、絵画と彫刻の「研究団体」として筋を通して行くと、創立会員らから伊藤清永前会長と中山忠彦会長に引き継がれた創立の精神を、この百回展を機に再確認した上で次に進みゆく、本会報もまたその片鱗をご紹介できるよう心掛けました。また99回展を終えて、戦後に弱体化し底を打った白日会の復興を後押ししてくださいました乙黒久先生と草壁隆先生、現在の若手作家が集う白日会の基盤を作ってくださいました阿方先生のご逝去がありました。

そして今回の100回展を何とか無事に執り行え、ほっとしていたところ、中山忠彦先生が突然に入院され身罷られました。また11月に急に退会された丸山勉常任委員が中山先生の後を追うように12月に急逝され、会にとつての大きな存在である方々を次々と失ってしまいました。心より、哀悼の意を表します。

白日会は大きな変わり目を迎えておりますが、皆の力で今後も前向きに進み行くものと思えます。数学者の岡潔は「過去を背負い、現在をふまえ、見えない未来に面して立つこと」と、「前向き」を定義されました。

寺久保文宣

発行 白日会事務所

寺久保文宣 阿辺隆 小河美智子

久保尚子 吉田純子 西原恵里子

印刷 六光社